

編集 報道委員会委員長 瀧元 智恵	第 207 号 2026 年 9 月	JAUW SAPPORO	発行 (一社) 大学女性協会 札幌支部 支部長 朝日 幸世
-------------------------	--------------------------	--------------	--

2026 年度 大学女性協会札幌支部 定時総会

2026 年4月22日に札幌支部の定時総会が開催されました。参加者は 7 名でした。
会場は JR tower hotel nikko sapporo にあるスカイレストラン丹頂となりました。総会時には会議ができる個室空間であり、会議後にランチをとりました。

総会では 2025 年度の活動を振り返り、『そらぶちキッズキャンプ』を訪ねたり、『創成川公園散策』が雨に降られてしまい大変だったこと、その後のランチタイムが楽しかったこと、『全国セミナーの発表』準備のために奔走したこと、雪道を歩いて豊平館歴史連続講座の『教師たちと女学校』を拝聴したことなど、充実した活動内容をたくさんの思い出話に花が咲く楽しい時間となりました。

2026 年度の活動企画も自主的に持ち込んでくださった会員のおかげで、サクサクと話がまとまってきました。議案事項であった調査委員会での発表依頼も支部の皆さんのご協力をいただけることとなり、挑戦してみることが決まりました。

お待ちかねのランチは、籠に美しく盛られていて、上品で美味しく、かやくご飯は皆でおかわりしました。素敵な会場を入念に下調べいただき予約してくださった押谷会員に感謝いたします。またこちらのレストランで総会があったら嬉しいです。(瀧元智恵 記)



2026 年度支部長会(5 月 16 日)に参加して

2026 年度定時会員総会および全国総会に先んじて、支部長会が行われました。
定時会員総会および全国総会については、すでにご自宅に郵送されている JAUW 会報第 288 号をご参照ください。支部長会の内容も上記会報に記されているとおりですが、現地参加の感想を一言報告したいと思います。

支部長会では、定時会員(社員)総会に諮る内容と、本部・支部間の事務事項の説明とがなされました。また、支部内で抱える課題と解決策案の共有がなされました。当初の議題として、移行法人終了後の会の方向性についても提案されていましたが、時間切れで割愛されそうになりました。この問題は、昨年度、支部の意向を検討してくださいという宿題となっていました。そのものの本部の方向性が明確でなければ、支部の意向を出しようがなく、この春の支部長会で何らかの方向性が示されるのかと思っていました。ですので、この部分が割愛されたのでは、支部は暗中模索状態です。そこで、札幌支部から本部の意向について質問させていただきました。

ここで会長(一般社団法人の代表理事)や担当理事からの回答らしきものはありましたが、本部(理事会)の意向は検討中であることがわかったのみです。会長からは「まだ表に出せないが・・・、云々」のことが多く聞かれました。さて、質問です。一般社団法人の社員であり、各支部の支部長は、会長から見て表なのか裏なのか、誰をもって表とし、どこを持って裏とするのか、あれあれ?と思われました。この件をもって、本部では支部に途中経過の情報をできる限りていねいに流すことを決められたようです。多数の会員の意思を一つにして前進させるためには、明快な情報公開こそが必須だと思われます。

一般社団法人から公益社団法人になるには、その手続きは確かにハードルがいくつもあることでしょう。ですが、本当に大切なことは、大学女性協会の理念が時代にあっているのか、活動が社会の要請に込れているのか、税額控除のためではなく、その目的のために進んで寄付をして支えたいと思わせる活動なのか、そこを問うことではないかと思います。(野寄由利 記)

第1回例会『外国人政策と日本語学校の現在－外国人はなぜここにいる』

今年度の第1回例会が6月27日（土）16：00～18：00、オンラインによって行われました。講師には一般財団法人東北多文化アカデミー・日本語学校経営をされている押谷祐子さんを迎え、「外国人政策と日本語学校の現在－外国人はなぜここにいる」をテーマにお話を伺いました。ZOOMには遠く九州や関西からのご参加も含め18名のご参加をいただきました。

押谷祐子さんは学生時代よりアジア諸国に興味・関心をもち、国際協力関連の雑誌社勤務を経て日本語教師として国内外で勤務してこられました。2025年吉永小百合さんが女性登山家を演じた映画「てっぺんの向こうにあなたがいる」が記憶に新しいかと思いますが、あの映画の主人公である田部井淳子さんの率いる初の女性登山隊の隊員として押谷祐子さんも参加をしており、実にバイタリティーあふれるお人柄でもあります。

当初はJICAの留学生など公のルートで日本に来ていた外国の人たちの支援業務をしていましたが、そうではなく旅行者でもなさそうだけれど、特に何をしているのかわからない外国人



を多く街中で見かけるようになり、そういった人たちとの接点を求めて日本語教師としての仕事を始められました。彼らの多くは日本語を習得し、日本で仕事を得て、その賃金で祖国の家族に送金をした、事業を起こしたいという意思を持ててきます。一方日本に滞在するには様々な在留資格条件があり、事例を交えて説明していただきました。また政府の政策によってその在留資格条件は都度変更が行われるなか、日本語教師は常に現場での対応を求められてきたという問題や、せっかく日本を選んでくれた留学生を日本社会に定着させ卒業、就職へと導くには、日本語教育の枠を越えた指導、たとえば日本人が当たり前に行っている日常の習慣（ゴミの分別、教室の掃除、夜は大きな声で騒がないなど）から日本文化に至るまでの教育が必要となってくるという、現場ならではの話を伺うことが出来ました。

今、技能実習生は卒業後の就職先となる企業が日本語学校の授業料を負担することで、学生は確実な就職先、企業は確実な人材確保という、いわばwin-winの関係を構築して来日するケースが多いそうです。講師の押谷祐子さんと司会を務めた私は義理の姉妹関係にあることから事前の打ち合わせの詰めが甘かったことが大きな反省点として残りますが、彼女の活動は40年以上見てきました。とにかくtry&tryの年月だったように思います。実は法事で7月に会いましたが、その翌週にはインドネシア、ベトナム、パキスタンへ9月入学希望の学生の採用面接に企業担当者と一緒に行くと話していました。ヘイトスピーチなど外国人排斥の声を上げる人々もありますが、今後の日本の労働力を担う人材を育成するためにも益々の活躍を期待したいところです。（押谷君予 記）

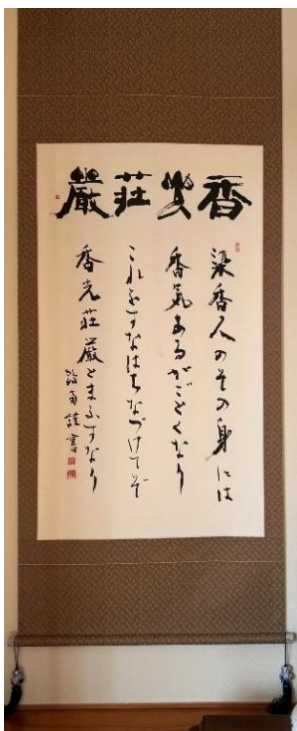


俳句同好会の楽しさ

私たちの俳句同好会は、毎月第2土曜日の午前10時から駅前のエルプラザ4階会議室で開いています。佐々木幸先生ご急逝のあと、陽美保子先生をお迎えして、はや、8年。句会の2時間は緊張の連続ですが、先生の温かくも鋭く的確なご指導のおかげで、緊張の中にも新しい学びを得て、2時間があっという間に過ぎます。不勉強の私は、毎回、季語や表記の誤りを指摘され身の縮む思いをしておりますが、僅か17文字の中に広がる世界の面白さは他に換えられないもののなのかも知れません。

句会では選句と講評だけでなく、先人の秀句の紹介と味わい方、さらに先人の推敲の過程などの講義もあります。また「基礎を鍛える」ために複数の例句から、特選・並選・問題句を選ぶシートなど、楽しみながら俳句を学ぶための工夫をしてくださって、とても贅沢な2時間です。和気あいあいとした中にも、ピリリとした緊張のある句会。俳句の奥深い世界を学ぶだけでなく、会員の皆様とのおしゃべりも楽しいのです。是非、皆様も一度覗いて見てくださいます。お待ちしております。

※陽美保子先生の第2句集『水のにはほひ』がふらんす堂から出版されました。是非お目通し下さい。(定価 2970 円税込) (出口好子 記)



香光荘厳 (こうこうしょうごん)

当寺、「報恩講」(9月1～3日)、今年の法中間(ほっちゅうま：お坊様たちの打合せ部屋)の掛け軸です。

香：かおり、お香、仏さまの優しさ
光：ひかり、ろうそく、仏さまの智恵、お導き
荘厳：しょうごん、仏さまを美しく飾ること

書いて下さった先生は、大東文化大学卒業後、銀座和光で「筆耕」をされていたそうです。先日の長い長い支部長会の後、この書を観て「この先生のような方が札幌支部に入って下されば良いのに」と思いました。

札幌支部 会員は皆優しく、親切で、楽しいところですよ！！ (朝日幸世 記)

「東京家政学院大学夏期集中講座：地域プロデューサー養成講座」に参加して

なぜ今から地域プロデューサーに？と、思いますよね。学生時代よりお付き合いの続く恩師(88歳)の強い勧誘(笑)で、67歳にして、大学院の科目等履修生になり、2単位を求めて夏期3日間の「生活経営学特論：地域プロデューサー養成講座」に参加しました。「地域プロデューサー資格」の取得はともかく、フィールドワークの現場が「那須温泉」に近いという「にんじん」に惹かれて、学生時代の友人二人を巻き込んで、体力と頭がついていくかを心配しながらの3日間を過ごしました。

私自身はお茶の水女子大学家政学部家庭経営学科出身です。家政学部というと、昔なら裁縫、しつけ、炊事、洗濯、掃除(サ行の家政)のノウハウを学び、良妻賢母を育てる学部とみられていました(昔ならば、女子高等師範で、良妻賢母を育てる先生を育てる)。ですが、私の通う頃には、家政学部は、科学、教養、工夫、計画、交流(カ行の家政)を学ぶ場所であり、児童学科、食物学科、被服学科などでは、心理学、栄養学、化学など科学的知見に基づいた学問を学ぶところでしたし、家庭経営学科にいたっては、人類学、法学、経済学、社会学を、家庭や家族の切り口で学ぶところでした。今では学部再編され、家政学部の名前も生活科学部に変わりました。男女の役割分担を助長するイメージをなくし、ジェンダーの垣根を超え、また、単身世帯でも、複数人の世帯でも、固定的な家族の枠組みを超えて、一人一人が生活していくうえでの必要な教養を学ぶ場所となり、「生活経営」とか「生活社会科学」という学問になっているのです。「生活経営」の理論や思想は専門分野でもあり、理解可能な範囲なのですが、それが「地域プロデューサー」と、どう結びつくのか、です。

「地域プロデューサー」とは、読んで字のごとく、地域をプロデュースする人です。イメージしていただくのは、たとえば、「札幌駅前の再開発」などは、行政と企業が行う大規模な地域プロデュース。夕張の「コンパクトシティ構想」もそうです。あるいは、廃校となった小学校を、地域住民のニーズに合わせて再生するようなもの、それは、小規模な地域プロデュースです。札幌駅前や夕張再開発と、廃校再生とは何が違うのか。あえて言うならば、前者は地権者や住民の声も聞くでしょうが基本的にトップダウン方式、後者は住民の希望を聞いて作られるボトムアップ方式とも言えるでしょうか。「生活経営学」は、生活者の視点を大切に作る学問ですから、それと結びつく「地域プロデューサー」であるならば、後者のボトムアップ方式の地域プロデュースでしょうか。そこに生活する人が何を必要としているか、どのような思いなのか、そのために何ができるかが優先されて、はじめて可能となる地域プロデュースです。とはいえ、たとえば廃校を再生するには、地域の声を拾いあげ、調整し、企画し、そのための資金繰りを検討し(銀行からの融資か寄付を集めるか)、行政と掛け合い(廃校の地権者？)、リノベーションし(建設業者かDIYか)、運営し…と、地域住民だけでは手に余ることもあります。それを陰になり日向になり、取りまとめるのがどうやら地域プロデューサーの仕事らしいのです。

ところで、現在の日本は超高齢社会です。地方には限界集落も増えています。地域コミュニティの消滅危機です。また、東京では地価と物価の高騰で、高齢者住宅の価格も居住費も上昇し、一般の高齢者の手に届くものではなくなっています。介護従事者数も減って、高齢者は介護難民になると言われています。さらに、高度成長期に地方から東京に出てきた労働者のために、東京郊外には大規模団地がたくさんあり、現在それらが老朽化・高齢化していて、その団地再生のニーズもあります。子どもの数が減って、小中学校が廃校となり、その校舎跡地の使い道が課題ともなっています。それらの現代的課題を総合すると、「手の届く経済性的高齢者住宅

を、地方か、団地を再生するか、学校の跡地を利用するかして建てよう。建物だけあればよいというものでもない。高齢者の生きがいや利便性を失うことなく、若者や子どもも共に暮らし、働きたい人が地元で働く場所もあるような、地域共生型コミュニティを作ろう」というテーマが出てきます。

その実践的モデルとして、私たちは栃木県那須町にある「那須まちづくり広場」を見学しました。東京から新幹線に乗って2時間程度の温泉で有名な町です。この名前で検索していただければ、ホームページをご覧になれます。面白い場所ですので、ぜひ、のぞいてみてください。ここは、「多世代、多文化交流の拠点。生きがいをもって最期まで」をキャッチフレーズにした、まさに住まう人の声を形にした現在進行形の高齢者住宅プロジェクトです。廃小学校の跡地利用ですが、校舎は、共有スペースやカフェ、ショップ、子どもの放課後クラブ、宿泊施設(ここの2段ベッドに泊まった)などに、元屋内プールは要介護1以上の人のグループホームに。元体育館は体育館として、もともとの近隣住民と、ここの住民の体育館兼避難所として使われています。そして、運動場には、住まう予定の人の好みの広さ、好みの素材を聞いて作られた共同住宅を建設。サービス付き高齢者向け住宅として、あるいは普通のファミリーの賃貸住宅にもなっています。自家製パンやケーキ屋さんもあります。暮らしている芸術家が作品を提供して、共有スペースを彩ります。周囲を那須の緑に囲まれて、自家菜園や牧場(障害のある人が働いています)などもあり、ここなら、都会の喧騒を離れてのんびり暮らすことができそうです。とはいっても、足の便は大切で、専用のマイクロバス(運転手も住人です)が、町の大きなマーケットや病院、駅などを巡回しています。自家用車を持つのも自由です。この「まち」全体を住民の人自身が運営しています。そして、東京から離れているので、普通の経済状況の高齢者にも手の届く範囲で暮らすことができます。ここで、地域プロデューサーは人々と共に暮らし、人々の要として機能していました。

那須温泉にのんびり浸かってから帰るという特典を、もちろん自主的に加えましたが、単位認定のためのレポートを書かなくてはなりません。そんな私がレポートのテーマとして白羽の矢を立てたのが、北海道の長沼町。ここに、「高齢者施設と保護犬施設が共生するコミュニティを作ってはどうか」という案を出してみました。犬猫好きな高齢者が、保護施設の犬猫たちの世話をしながら、保護施設で働く若者たちとも交流しながら、のんびり余生を過ごせたらいいかな、という、あまりにも犬好きならではの発想です(笑)。さて、そこに住みたいと言ってくれる人がおられ、私の単位も取れるとよいのですが。



©那須まちづくり株式会社

(野寄由利 記)